

〈特別寄稿〉

学説が物語になるとき

—イースト・サイド・ストーリー—

中川 晶

京都看護大学

When the Theory Turns into the Story: The “East Side Story”

Akira Nakagawa

Kyoto College of Nursing

キーワード

物語	story
ナラティブ	narrative
学説	theory
物語化	narrativization

昔から筆者は、自分が納得した面白い学説や理論を物語にしてしまう癖がある。リン・マーグリスの細胞共生説（ミトコンドリアの起源）や生物の擬態という現象の解釈をベイツやミューラーがしているが、これを子どものいじめの問題に発展させたり、医療職の献身を究極まで進めてみた「カメのお医者」等々。

さて、今回の物語のテーマはフランスの人類学者イブ・コパンが提唱した人類発祥説「イースト・サイド・ストーリー」を筆者流にアレンジして物語にしたもので、絵付きで紙芝居風にして大学生への授業に用いたこともある。

それでは、学説が物語になるとどうなるかお読みください。

「たのむから、見逃してくれる。もう二度とやらんから」

小柄なコパンはおでこを地面にこすりつけて謝りました。大柄なウータンは腕組みをしたまま、しばらくコパンを見おろしていましたがやがて静かな声で言いました。

「嘘をつくというのは悪いことだ。それがおまえに

はなぜ分からんのだ。」

コパンは地面を見つめながら心のなかで思っていました。

（なぜ、嘘はいけないといわれるのだろうか？ 多くの嘘のおかげで仲間たちはお腹いっぱい食べられるようになったのに・・・）

いまから 1500 万年まえのアフリカから物語は始まります。これまで深い森林だったこの地域には多くの種類の類人猿が棲んでいました。ところが、この頃アフリカに大規模な地殻変動が起こり始めました。いまのエチオピアやケニアのあたりで大規模な隆起があり標高 2700 メートルを越える山脈が形成され、この山脈のため西から東に安定して流れていた気流が乱れ、山の東側では雨が降りにくくなって森が育ちにくくなりました。それから 300 万年ほどすると地殻変動はさらにつづいて南北に蛇行する長い谷—大地溝帯—が出来て西側と東側は決定的に分かれてしまいました。西側にいた類人猿たちは昔からの森の生活に適応したチンパンジーやゴリラなどになっていきました。

一方、東側に棲んでいた類人猿はさまざまな変化

をたどりながらついに人類へと辿り着きます。この物語はアフリカの東側の物語、つまりイーストサイド物語なのです。

さてお話を 1500 万年まえのアフリカの密林にもどしましょう。この頃はまだ東西に分かれていませんでしたから、人類とゴリラやチンパンジーの共通の祖先の一群がこの密林にひっそり棲んでいました。人類の祖先が出現するのがいまから 700 万年前ですからこの祖先にはまだ名前すらありません。ただ、木の上で生活するサルのような種族でした。この群のボスの名をウータンとといいます。ウータンはおだやかな性格で全ての生き物の生きる権利を大切にしてきました。そのため、この群は 30 匹ほどの小さな群でしたがほとんど争い事のない平和な種族でした。食べるものといえば木の実や果物が主でした。ときには地面におりてきて蟻やミミズを食べることもありました。

ところがコパンが生まれてから群れに変化が起こり始めました。コパンは生まれつき他の仲間より大脳が発達していて、いろんな工夫を考えつきました。まだ子どもの頃に蟻を食べるのに小枝を使うことを発明しました。蟻の巣に細い小枝をつっこむとたくさんの蟻が小枝についてきます。そうすれば、一度にたくさんの蟻を食べることができます。このやり方は群のなかで急速に広がっていきました。

またあるとき、樹の上からオオカミのような動物が野ウサギを食べているのを見たコパンは急に食欲をそそられて、そっと樹を降りて大きめの石を何個も抱えてもう一度樹にのぼり、突然オオカミめがけて石を投げつけ始めました。驚いたオオカミが逃げ



た後コパンはゆっくり樹から降りてきて恐る恐る野ウサギの生肉を口にしました。

「ん？なんというおいしさ。蟻なんかより断然うまい！」

これが肉食の起源です。コパンは生肉の切れはしを仲間にあげようとしたのですが誰も気持ち悪がって、最初のうちは食べませんでした。しかたなくコパンは生肉の切れはしは高い樹の枝に突き刺してそのうち忘れてしまいました。肉は風通しの良いところに置き忘れられたのでしばらくするとほどよく乾燥していい匂いをあたりに漂わせました。少しおっちょこちょいのチンプが匂いにつられて干し肉を口にしました。

「ん！うまい。気持ち悪くないし、それに長持ちするもんな」

これが保存食のはじまりです。チンプはコパンの大親友でした。そのうち他の仲間も干し肉を食べようになりました。でも簡単に野ウサギが捕まえられるわけではありません。たまに肉が手に入ると取り合いのケンカがおこりました。

そのうちコパンは落とし穴を使ってもっと大きな動物を捕まえる方法を工夫しました。コパンは仲間とともに獲物を落とし穴の方へ追い込んで、獲物が穴に落ちるとみんなで上から石を投げつけて殺し大量の肉を獲得することに成功しました。

しかし群の全員がコパンのやり方に賛成したわけではありません。コパンのやりかたは嘘があるという意見がありました。蟻をだまして小枝で釣ったり、落とし穴も卑怯な方法だということです。特にボスのウータンはコパンのやりかたに強い反感をもっていました。

ある日ウータンはコパンを呼び出して言いました。

「われらは自然の一部だ。だから決められた生き方がある。蟻には蟻の、ミミズにはミミズの生き方がある。われらだって例外じゃない。他の動物をだまして殺すことはいけないことだ。分かるか？おまえが蟻釣りをするまでは必要な分しか蟻を捕らなかった。おまえが肉食をするまで誰も肉を欲しいとは思わなんだ。いいか、欲望というものはいったんふたが開くと果てしないものなのだ。おまえはそのふた

を開いてしまった。もはやわしらの群にいることは許されん。即刻おまえと意見を同じくする者たちとともに群を立ち去れ！」

声を荒げたことのないウータンがきびしくコパンを叱りつけました。コパンは叱られるとは思ってもみませんでした。でもいちおう謝ってみました。「たのむから、見逃してくれろ。もう二度とやらんから」

冒頭の場面です。でもウータンは許してはくれませんでした。それでコパンは16頭の仲間とともに東の森に移り住み、さらに様々な工夫をして生活を豊かなものにしていきました。食料が多く手に入るようになると子どももたくさん育てることが出来るようになりコパンの仲間はどんどん数が増えていきました。一方ウータンたちはコパンが去ると再び昔ながらの悠久の生活に戻りました。そして深い森のなかでひっそり時を刻み続けたのです。

最初にお話ししたようにアフリカ大陸の南北に出来た山脈と深い谷が西側と東側を遮断してしまい、ウータンの子孫とコパンの子孫はその後数百万年に渡って顔を合わせることはありませんでした。

西側ではその後あまり変化はありませんでしたが、森をつたってアジアの方まで行った者がありました。この類人猿は群れることさえ拒否し、さらに深く自然と一体化しようとする精神性を深めて行きました。そして彼らは独自の精神文明を作り上げました。彼らの名をオランウータンといいます。

さてイーストサイド（東側）はその後どうなったのでしょうか？地殻変動のせいで森は少なくなりサバンナ（草原）が果てしなく広がる大地となりました。この環境の変化は樹に住むサルにとっては致命的な打撃でしたがコパンの子孫にとっては大躍進のきっかけとなりました。アウストラロピテクスと呼ばれるコパンの子孫が木から地面に降りてきたようです。そして大地で暮らし始めました。大地はライオンやトラの祖先（ライオンとトラが分かれたのが500万年ほど前のことです）がわがものがおで闊歩する危険な場所でした。それでもコパンから受け継いだ大きな脳を更に進化させながら子孫たちは

着実に数を増やしていきました。その間にコパンの子孫も様々な系統に分かれていったようです。ある人類学者の計算によれば700万年まえに他の類人猿から枝分かれした人類の祖先はそれから少なくとも16種にも分かれたと言われています。しかし最後にはホモ・サピエンス一種を残してこの系統は全て絶滅してしまいました。ただし、200万年より以前の化石はとて最少なくてどんな事情だったのかはまだよく分かっていません。

おそらく、コパンの子孫のなかで一番脳が発達した者が残ったのだらうと思います。でも、本当に脳が発達する方向は正しい方向だったのでしょうか？脳の発達は両刃の剣でした。

250万年ほどまえにコパンの子孫はついに鋭い刃を持つ石器の作ることが出来るようになりました。この石器を使ってより大きなシカやイノシシを狩ることが出来るようになり食生活はより豊かになったのですが、生活が豊かになると今度は欲が出てきます。獲物を独り占めにしたいため、あるいはボスの座につきたいために石器の刃を仲間に向ける者が現れてきました。仲間同士の争いは過激さを増し血で血を洗うようなひどい状態になりました。

このひどい状態にあいそをつかした一群がアフリカから逃げ出しました。そしてユーラシア大陸に移動して静かに暮らすようになりました。この一群はネアンデルタール人と呼ばれています。彼らはこころ優しい人々でした。死んだ仲間に花を添えて埋葬する習慣があり、病気の仲間や年取った仲間のめんどうもみていたようです。

4万年前、平和だったユーラシア大陸に脳を極端に進化させたクロマニヨン人たちがアフリカから侵入してきました。

ネアンデルタール人の村長ボランが大勢のクロマニヨン人が村に入ってきたとき歓迎の挨拶をしました。「皆さん、遠いところからはるばるようこそいらっしゃいました。どうぞ、我々の友好のしるしとして存分にお召し上がり下さい」

とボランたちは満面の笑顔で一生懸命集めた木の実や昆虫などの食料を彼らに差し出しもてなそうと

しました。ところが、クロマニヨン人たちはニコリともしないで差し出された食料をガツガツ平らげました。食べ終わるとボランを睨み付けてひとりが言いました。

「友好だと！笑わせるんじゃないねえ。おまえらがオレ達と祖先が同じなんてむかつくぜ！サルみたいな顔しやがって・・・なあアドルフ」

アドルフと呼ばれたクロマニヨン人は目つきのよくない小さな男でした。アドルフは年老いたボランの腕を突然後ろにねじあげました。そして妙に甲高い声でボランに言いました。

「ネアンデルタール人は劣等人種なのだ。祖先が我々と同じであるはずがない。こいつらは不潔で低脳で生きる値打ちのない生き物だ。よって全員抹殺する！」

アドルフはクロマニヨン人のなかでも特に凶暴な性格でしたが、カリスマ的なところがあり多くのクロマニヨン人たちが熱狂的に崇拜していました。アドルフが目を細めて部下に命じました。

「ネアンデルタール人は全員抹殺せよ！」

そう言うやいなやアドルフはボランの頭に石斧を叩きつけました。ボランの頭から流れる赤い血を見たクロマニヨン人たちは興奮し、高度に磨き込まれた石器の鋭い武器でネアンデルタール人に襲いかかりました。村人全員が殺されるのに一日かかりませんでした。

その後、アドルフとその仲間はネアンデルタール人の村を次々襲い、殺戮を続けました。

3万年より前に、ネアンデルタール人は本当にこの世から一人もいなくなってしまうました。そしてユーラシア大陸はクロマニヨン人だけの世界になりました。人間以外の動物も仲間を殺しますが、人間ほど徹底的に効率よく殺す動物は他にいません。

その後、クロマニヨン人の仲間は世界征服に向けて世界中あらゆる方向へ進軍しました。5万年前にはオーストリア大陸、2万年前には誰も住まなかったシベリア地方まで住むようになりました。1万2千年まえにはとうとうベーリング海を越えてアメリカ大陸に移り住むようになりました。大躍進というべきでしょうか？祖先であるコパンはさぞ鼻高々だったことでしょう。しかし、手放して喜べる

ほど事は単純ではないのです。同じホモ・サピエンス仲間のネアンデルタール人を絶滅させた話はしましたが、それ以外の仲間も絶滅させていますし、生息域を広げるとに様々な他の動物種も絶滅させてきました。北アメリカにいたマンモス像、ヨーロッパの毛サイとオオジカ、南アフリカのジャイアント・バッファロー、オーストラリアのオオカンガルーなどが高度な技術を身につけた狩人によって滅ぼされてしまいました。その後も動物界はいくつもの貴重な種をホモ・サピエンスによって失うことになりました。

基本的には狩猟採集民だった彼らが1万年ほど前に小麦やトウモロコシなど植物を栽培することで定住生活に入ります。植物栽培で人類はさらに豊富な食料を確保するようになりました。

しかし、逆にこれは人類が住み始めた地域から野生の植物種が絶滅することを意味しました。また人類の食事が偏り始めたことも意味します。虫歯が出現したのもこの頃です。

定住すると環境が汚れます。寄生虫や細菌も発生しやすくなり伝染病が始まりました。しかし、大脳の肥大化というパンドラの箱を開いた人類にはもう後戻りは出来ませんでした。逆に得意の知恵で様々な問題を解決しようとしてしました。農業技術の改良、調理法の改善（焼く、煮る、炊くなど）、病気に効く植物から薬を発明したり、それは涙ぐましい努力をしてきました。

そして科学という方法を編み出してから人類は一時、バラ色の未来を夢見ることができました。もはや敵なし「人類のために地球はある」というまで傲慢になりました。しかし、地球は人類に荒されてもう息絶え絶えになっていたのです。

森林の伐採は世界規模で進み、地下資源は底をつき、地球規模の温暖化のため水位が上昇してきました。人類は金の卵を産む鶏である地球を殺そうとしています。

人口は世界中にあふれ、住むところがなくなってきました。でも能天気な人類は地球に住めなければ、宇宙のどこかの星への移住を考え始めました。そして、果てしない宇宙のどこかに住んでいるかもしれない高度の科学文明を持っている宇宙人に対して電

波で何度も何度もメッセージを送り始めました。
「我々は地球人です。科学も発達しています。でも、
もっと高度な科学をお持ちの宇宙人さん我々と仲良
くしましょう」

虫のいいメッセージです。あわよくば人のいい宇
宙人がやってきて高度な科学技術を授けてくれると
でも思ったのでしょうか？

スマトラの奥地、最後に残った密林に絶滅が心配
されている野生の類人猿が住んでいます。オラン
ウータンです。彼らはイーストサイド物語が始まっ



た頃早々と、人類に向かう愚かしさを悟り、人類と
は逆の進化を遂げました。悠久の自然とともに生き
る道を選んだ彼らは群れることさえ拒否し生涯のほ
とんどの時間を孤立してすごします。

高い々々梢のてっぺんで一頭のオスのオランウー
タンが目をつぶって瞑想しています。彼は宇宙のこ
とを考えていました。彼らは科学こそ発達させませ
んでしたが、宇宙のことが手に取るようにわかるの
です。彼の心にある映像がひろがりました。

白鳥座のある惑星に住む宇宙人が人類の発した電
波を受け取りました。この宇宙人は地球より高度の
科学文明を持っていました。でもひとつ問題があり
ました。というのはこの宇宙人は人類と同じ方向に
大脳を進化させていたのです。だから、この宇宙人
は地球に人類が居ることを知るや、すぐさま高度な
武器を携えて軍隊を地球に向かわせました。もちろ
ん皆殺しにするためです。クロマニヨン人がネアン
デルタール人にしたように・・・

オランウータンはこれを知ると大きなため息をつ
きました。